慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	C・M・マイヤー著 麻田四郎・山宮不二人訳 国際貿易と経済発展
Sub Title	
Author	深海, 博明
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.2 (1966. 2) ,p.218(108)- 219(109)
JaLC DOI	10.14991/001.19660201-0108
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660201-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

および ライン・ヴェストファーレン製鉄業における「混合企業」の創出（第三章）が分析され、その上に「産業資本と銀行資本」との関係を示す「ドイツ金融資本の独占機構」（第四章）と、「占領政策とルール重工業の再編過程」（第五章）が明らかにされる。第二部労働関係分析では、ベルリン機械工業における労働関係（第一章）、ルール炭鉱業における労働力の存在形態（第二章）と労働問題（第三章）がとりあげられた後に、「ドイツ石炭鉱業における賃金形態が Gedinge（鉱山業の坑内作業における出来高賃金ないし請負賃金）を通じて究明される。第三部政策分析では、ドイツ帝国主義と財政改革問題（第一章）、および「転換期のドイツ経済政策――『結集政策』と自由思想連合――」（第二章）をとりあげながら、「ドイツ・ブルジョアジーの類型的特質」を把え、エルベ河以西（西ドイツ）と以東（東ドイツ）における経済構造＝資本類型と循環の特質を類型化しながら、ドイツにおける帝国主義論展開の現実的基盤を明らかにしている（第三章）。（未来社・A5・vii＋四四八頁＋xxxviii・一八〇〇円）

―常盤 政治―

G・M・マイヤー著
麻田四郎・山宮不二人訳

『国際貿易と経済発展』

一九六〇年代は南北問題の時代であるといわれ、一九六四年に開催された第一回国連貿易開発会議における論議に象徴されるように、本書のテーマたる国際貿易と経済発展の問題は、現在の関心の焦点となっている。それ故に、これ迄にも数多くの文献が存在し、夥しい研究が行なわれてきたが、むしろ雑多な見解が打ち出され、混乱・混迷の感を強くするばかりであった。

これに対して、本書は、これらの夥しい文献・研究を、一つの理論の筋を通して、整理・体系化し、この問題に対する一つの明確な方向づけを与えたという意味で、注目されるのである。すなわち古典派の国際貿易理論を基礎に、その展開・拡張として、経済発展と貿易のほとんどすべての問題が解明可能であり、従来これら理論に対してなげかけられてきた反論・批判がいかに誤解にもとづき、的はずれのものであるかを明示しているのである。

著者は「古典派の伝統に立つ理論が発展問題について妥当性と現実性にかけるという一般の批判に対して、わたくしは承服できない。それどころか、貿易と発展の関係に関する最も適切な命題は、伝統的貿易理論と密接に結びついているのである。もし古典派理論の静態的仮定をゆるめて、必要な諸変数を加えるならば、伝統的貿易理論は、いぜんとして発展問題の解明に有効な基本原理となりうるであろう」（序文V）との基本的立場から、国際貿易の純粋理論と貨幣理論の主要な問題を発展の国際的意義という観点から再検討している。ただここで採用されているのは、大体において比較静学の手法であり、変動過程の時間的径路を分析するといった真の動学理論ではない。

本書は、第一章序論、第二章比較生産費、第三章交易条件、第四章対外均衡、第五章外国資本、第六章貿易政策、第七章貿易を通じる発展、より構成されているが、それらは、五章までの古典的貿易理論の発展問題への拡張的適用のこころみと、六章以降の著者のきわめて積極的・論争的な政策的提言、積極的主張とに大別される。

勿論、各章各内容の詳細に立ち入ることは不可能であり、是非本書の一読をすすめるものであるが、ただ着目さるべき点を二・三列挙しておきたい。

まず比較生産費理論の動態化のこころみについては、ヒックス・ジョンソン流のバイアス論を用いての展開であり、説明の明快さをのぞけばさしたる新味はない。第二に、交易条件についても、(1)経済発展と交易条件の関係、(2)交易条件変動の厚生的意味、(3)低開発国交易条件の長期的悪化傾向、の三つについて伝統的理論の立場およびバイアス論を用いて反論を加えており、これまた周知のものが多い。第三に、対外均衡では、経済発展の貿易収支に対する影響が分析され、低開発国では国内の貯蓄供給を増大することが期待できず、外資導入の必要性が強調されている。第四に、外国資本においては、低開発国の経済発展という見地から、外国資本の利益・不利益が分析されており、従来のトランスファー理論とはことなり、生産資本と発展諸力との相互関連につき、興味ある分析が行なわれている。

また政策的問題については、これ迄展開されてきた種々なる保護貿易主義の主張に理論的・現実的反論を加え、それらが非常に限られた場合にのみ、支持されるのであり、その有効性は大いに疑問視されるのである。最後に貿易を通じる発展では、従来の貿易を通じて、低開発国の経済発展が行なわれるとする著者の積極的展開がなされている。問題は、貿易の発展効果をさまたげる多くの阻害要因（市場の不完全性と社会的・文化的・政治的硬直性）を排除し、その効果を高めるような政策をとることであり、「したがって、貿易の利益が成長の利益と調和し一体化するか否かは、結局のところ、一国が、いろいろな国内政策を有効に駆使して、経済変動ばかりでなく、社会的・政治的変動をひきおこし、そして、貿易の発展促進作用に対してその国の経済をより敏感に反応させることができるか否かにかかるのである。」（二三九頁）すなわち基本的には、経済構造全体の転換能力が問題にされねばならないのである。

このような本書の伝統的理論を基礎におく一貫した立場からの展開・整理に関し、批判された側からの反批判・反論が当然多くの人々からなされるであろう。しかし伝統的理論にのっとり、それを積極的に展開し、現在の緊急な問題に解答しようとし、また十分にその理論が有効であることを示された本書の基本的方向には、多くの人々が賛意を表するにちがいないと確信される。

一方から他方へのウェイトの極端なかつ急激な移動には問題があろうが、伝統的理論の意義とその有用性を明確化した点で、本書の価値は高いのであり、訳文も簡明であり、多くの人々の一読を心から推奨する次第である。現在のところ、かかる反省に基づいての新しい展開・深化がとくに期待されているといえるのではなかろうか。（ダイヤモンド社・一九六五年十一月刊・B6・二七五頁・六八〇円）

―深海博明―

＊　＊　＊

宮本又次
合田裕作著

『経済変動の歴史的研究』

今日、経済史では、発展を、それ自体に内蔵する諸矛盾の相剋に求めない。何か一つ、起動的要因を所与のものと見立て、発展を、その影響のなかで眺めようとする立場が一般化しつつある。新しい型の経済史の誕生であった。その間に、著者らが果した先駆的役割